（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏　名　吉川　太一郎

遼は 10 世紀から 12 世紀初頭にかけて中国北方を支配した契丹人による王朝で、仏教を採用し、契丹大蔵経など、後世に残る大きな事業を成し遂げた。近年、日本への影響も注目されている。遼の仏教の歴史に関しては、戦前からある程度の積み重ねがあるが、その思想面に関する研究はきわめて遅れており、部分的な研究はあるものの、その全体像はいまだに描かれていない。

本論文はそのような未開拓の領域に正面から挑んだ力作で、華厳と密教を中心とする遼代仏教思想の全体像の解明を目指している。本論文は全九章からなる。第一章では、従来の歴史研究を参照しながら、遼代の仏教文化の展開を概観する。第二章では、第八代皇帝道宗の仏教信仰の実態を解明し、道宗自身の著作の分析とあわせて、その仏教理解の水準の高さを実証した。第三章では、遼代の仏教教学の中心となる華厳の場合を取り上げる。遼代には唐の華厳第四祖とされる澄観の『華厳経随疏演義鈔』の研究が盛んとなり、『華厳経』自体の注釈書よりも、『演義鈔』の注釈書が多く著わされたことを明らかにし、それらの注釈書について検討を加える。第四章では、その中でも代表的な鮮演の『談玄決択』を取り上げ、金沢文庫から発見された巻一を中心に分析し、その特徴を解明している。第五章では、鮮演が譬喩を多く用いていることに着目し、それが宗密の影響下に展開していることを明らかにした。続いて遼代の特徴的な思想を思想史的に位置づけることを目指し、第六章では華厳の成仏論の展開、第七章では華厳と天台との交渉の中で、もともと天台の特徴とされた性悪説がどのように変容したかを論じている。第八章は密教に移り、その特徴を華厳との調和、並びに陀羅尼信仰の盛行という点に求め、特に覚苑の『大日経義釈円密鈔』の思想の分析を試みた。遼代には、『大乗起信論』に対する竜樹の注釈とされる『釈摩訶衍論』の研究が盛んになったが、第九章ではこの点を取り上げ、『賛玄疏』『通玄鈔』『通賛疏』など、遼代の『釈摩訶衍論』注釈書の分析を行なっている。

以上のように、本論文は従来まとまった研究のない遼代の仏教思想を、はじめて総合的な視座から本格的に扱ったものであり、唐代仏教を受けながら、華厳と密教を中核として発展した遼代仏教思想の特徴を、堅実に文献を踏まえて解明し、その成果は新たな知見に満ちている。これによって遼代仏教は単なる中国仏教史の周辺というに留まらない重要性を持つことが明らかになり、今後の中国仏教・日本仏教の研究にも寄与するところが大きいと思われる。何分にも多数の難解な文献を渉猟しているため、やや論述にこなれていないところがあるなどの問題点はあるが、本論文の大きな成果に鑑み、博士（文学）の学位を与えるにふさわしいと判断する。